

ことばの獲得

―異世代、異文化の人たち
との交流をとおして

北島公之

「さあ、泥縄状態ならんように、早い時期から大
学受験の過去問やるぞ！」
「先生、ドロナワってなん
スカ？」「インテリの君た
ちが、泥縄知らないの
か！」「あの一、インテリっ
てなんスカ？」

高等学校において、特に小論文や現代文の授業を行う場
合、強く実感するのは、ボキャブラリーの問題である。当
然知っているものと思っていたことばを生徒は全くわかっ
ていなかった。こんな経験が教師には少なからずあるはず
だ。このギャップが文章の趣旨にからんでくると、指導す
る上で致命傷になる。

何も、一切のことばの意味を説明せよ、と言っているの
ではない。我々には、ことばを獲得するに至った背景や歴
史がある。そうした、ボキャブラリーが産み出される環境
にもっと目を向けたい。

例えば、異世代の方々や異文化を有する方々との交流の
場を意図的に設定することだ。保育園に通っているわが家
の次男は5歳上の兄から、その兄は地域（ラグビースクー
ル）の先輩たちから、多大なことばの影響を受けている。も
ちろん、親や祖父母との会話のシャワーも血肉となってい
る。自分の家族・友人やそれ以外のコミュニティの人たち
とかかわり合いながら、我々は徐々に語彙を増やしている。

『国語表現Ⅰ』（三省堂）に、「クラス企画 ミニ講演会」や

「聞き書きの世界―身近な人の話を聞こう―」という単元が
ある。そこでは、ミニ講演会に向けた企画準備や身近な人へ
のインタビュの手順などが主に取り上げられている。

実際の講演会やインタビュで語られたことばには、生
徒の言語能力を育成する上で見落としてはいけない要素が
ある。まずは、異世代や異文化の人たちが用いる「ことば」
に注目させてみることだ。自分たちにとつて異質なことば
を見つけ、派生させながら未知の世界を探り出していく。

「能楽師の皆さんが一番緊張する時は？」

「そうですね。装束をつけて鏡の間にいる自分が、名ノリ
笛に合わせて、これから橋がかりに出ていく瞬間ですかね」
以前に行ったミニ講演会での、ある能楽師のことば。こ
うした能楽テクニカルチームを、生徒はむしろ面白がり、自
分たちとは異質なことばを、さらには能楽の世界にかかわ
る人々について自ら調べ出していった。

また私は、漢詩の学習の中で、大学で学ぶアジアの留学
生たちと高校生をデイスカッションさせたことがある。「こ
のことばを、どう言い換えればわかってくれるのか」。場の
設定で芽生えた他者意識が、彼らの言語感覚を鋭く磨いて
いくありさまをつぶさに感じとることができた。

自分のことばを見つめ直し、言語生活の向上につながる
ような取り組みをめざしたいものである。

きたじま ひろゆき

十六年間公立高等学校に勤務ののち、現
在、石川県教育委員会に勤務。ワキ方能楽師（下掛宝生流）と
して、時に加賀宝生の舞台にも立つ。